

## 国内研修報告書

私たちが行った活動はパキスタンの聴覚障害者のためのアップサイクルによる口元が透明マスクの制作です。この活動をするきっかけは2020年12月3日に開催された「SDGsで南アジアとつながる、新型コロナと障害者の生活」と題したミニレクチャーに参加したことでした。そこで私は、パキスタンの聴覚障がいを持つ人たちの生活や情報伝達に深刻な影響を及ぼしていることや、聴覚障がい者のための透明マスクのニーズがあることを知りました。ここでの学びを学びのままで終わらせることは問題解決に繋がらないと思い、そんな人々の日常生活での障壁をできる限り無くしたいと考えた結果、透明マスクの開発・作成に至りました。このアップサイクルマスクは、いらなくなったものや廃棄物に新しいアイデアで付加価値をつけて新しいものに生まれ変わらせる「アップサイクル」を通じて、SDGs達成に貢献することがコンセプトになっています。そのため、生地には不要となった着物、口元の透明部分には大学キャンパスにあった破損したビニール傘、ゴム紐はいらなくなった靴紐を使用し、合計20個の透明マスクを試作品として作成しました。そして、その試作品をパキスタンに送り、パキスタンにいる聴覚障害者の人を対象にオンラインワークショップを開催しました。ここでは、パキスタンのコロナの実態を知ること、それから実際のニーズや意見を把握し、作成するマスクに反映させることを目的としました。そこでわかったことは、パキスタンでは、このような口元が透明のマスクは入手しづらく、唇や歯、あごの動きや表情などからコミュニケーションをする難聴者は、特に困難を強いられているということです。また、ワークショップに参加した37人のうち、9割以上が「通常の口元が見えないマスクによってコミュニケーションが難しくなった」と訴えていました。そして、試作品を実際に使った際の問題点として、曇ってしまうことが挙げられました。このフィードバックを受け、さらに改良に取り組みました。制作時にメガネ、ゴーグルの曇り止めのプレーをかけ、現地の方には曇り止めの代わりとして食器洗剤を薄く塗ることを勧めました。

さらに、今回の国内研修の選定先である一般団体法人ソザイクルにマスク改良のための研修及びお話を聞きに訪問しました。そこでは、家庭内のいらなくなった古着や、着物を回収しリメイクを行い、新しい循環型社会を促進していく活動が行われていました。これはSDGsのゴール12である、作る責任使う責任にも貢献しています。このように私たちのアップサイクルや、SDGsのコンセプトと重なる部分があり、選定した理由でもあります。過程でいらなくなってしまうが、してることが出来ないものを回収し、作り手の方にまた新しいものにリメイクしてもらい、もう一度使ってもらえる製品にすることで、捨てたくない人の気持ちを大切にしているということが、ソザイクルを運営する大丸様のお話から伝わってきました。さらに、過去には手作りマスクの販売も行ったというお話も伺うことが出来ました。手作りマスクは、生地を布にすることで、保湿やおしゃれ、エコといった特徴を生かしたものを取り扱ったそうです。

ソザイクルの訪問で得た知見を参考に、マスクの改良を行い、実際に聴覚障がい者が使えるマスクを完成させたところで、活動の規模を拡大して本格実践をすることを決めました。パキスタン政府を巻き込み、シンド州の州都であるカラチにマスクを送ることにしました。それと同時に、コロナの流行によって去年行うことのできなかった成人式を、自分たちオリジナルの形で実現させるための企画も実現させようと考えています。具体的には、日本の伝統文化でもある着物を使用したアップサイクルマスクをカラチで暮らす聴覚障がいを持つ同世代の女性に贈り、オンライン成人式を開くことです。それまでは、現代福祉学部の有志3人で取り組んでいたのですが、活動規模を拡大したことに合わせて人員を増やすことにしました。2021年8月には、法政大学で日本手話の講義を履修する学生と立教大学の学生から有志を募り、ボランティアを計30人集めました。透明マスクの材料に不要となった着物を使っていることから、私たちはこの取組みを昨年新型コロナの影響で行うことのできなかった「成人式」の代わりと位置づけています。国際障害者デーである12月3日に記念イベントとしてオンライン成人式を予定しており、本取組みを成人式として成し遂げたいと考えています。

この活動において達成されるSDGs目標は4つあります。まずゴール5の「ジェンダー平等の実現」と、ゴール10の「人や国の不平等をなくす」です。コロナ禍においてロックダウンが行われたカラチでは公共交通機関や公共バスは使用することが出来ませんでした。パキスタンでは聴覚障害者の運転免許の取得が長い間認められていなかったため、公共の移動手段を使う人が多い中、その手段が無くなってしまうのは不平等であると言えます。また、オンライン教育が主流となりつつありますが、唇の動きから話を聞き取りやすくしている聴覚障害者の方からすれば字幕や手話通訳がないままの教育や、オンラインの学習教材にも配慮がされているとは思えませんでした。今回のアップサイクルマスクにより直接的な不平等が無くなるわけではありませんが、聴覚障害者の人はもちろんそれ以外の障害を持っている人や、パキスタンの国の問題としてジェンダー差別を受けている人がいるという実態を周知するきっかけになれば良いと考えています。次にゴール12の「つくる責任とつかう責任」です。アップサイクルをしたマスクを利用することにより、消費する人に語りかけると共に地球に配慮したマスクになっています。最後にゴール3の「すべての人に健康と福祉を促進する」というものです。コロナ禍においてマスクは今や必須の感染対策となりました。ですが、聴覚障害者において話者がマスクをするのは会話が難しくなる大きな要因です。そこで透明マスク作成により聴覚障がい者の人も困らないコロナ対策を実現できます。また、これはコロナによってクローズアップされた問題ではありますが、アップサイクルマスクは将来にわたって聴覚障がい者の生活に役立つと確信しています。

アップサイクルマスクの活動を通して学んだことは、障がい者は障がい者福祉の直接的支援だけでなく、地域のサポートやボランティアなどの活動によって誰もが支えられるということができるといことです。現在、障がい者福祉は障がい者への直接的な支援ばかり

りですが、これからは障がい者を支える人たちを支援する「間接的な支援」が障がい者の生活を豊かにし、社会への認知にも繋がると考えます。アップサイクルマスクの活動は奨励金や奨学金に頼り、資金や物資の調達を行いました。そういった制度は本来、障がい者福祉にあるべきだと言えるでしょう。取り組み相応の奨励金や物資提供を行ったり、さらにはその活動を社会に周知させたりすることがこれからの障がい者福祉にとって重要になってくると考えます。この国内研修の支援された資金で、フィールドワークも行え、活動の幅を広げることが出来ました。今後も、障害者福祉に携わる上で、この活動の経験を活かしたいと思っています。